

Hop Step Jump

12

初任者研修第 12 回

授業づくり⑥

アンケートの感想から

平成 27 年(2015 年)のスタートになる共通研修は、文部科学省教科調査官の富山哲也先生をお招きしての研修でした。午前に中学校、午後には小学校の先生方を対象に、言語活動と学習評価についてお話いただきました。

学力と一言で言われているのをよく聞きますが、“学力”の必要性を冒頭でとても感じました。そのために私たちがどのように子どもと関わっていくべきなのを考えなければならぬと実感しました。復習ができる自主勉ノートは効率的で負担も減り、子どもも勉強を進めやすくなるのでぜひやってみます。ありがとうございました。また、評価の仕方についてとても悩んでいたのですごく良い方法を教えて頂けて嬉しいです。評価規準をきちんと設定していないと手立ても考えられないことがとても印象的でした。評価をする研究会はとてもおもしろそうです。

富山先生は冒頭、竜巻に巻き込まれ体育館の屋根が飛ばされた学校のエピソードをお話されました。割れたガラスが体育館内を渦巻き、クラブ活動中の子どもたちを襲いました。そんな時にどう判断して身を守るのか…。予想もしていなかったこと、かつて経験したことがないようなことが起こり驚かされます。

「情報」はあるが「正解」はない時代だからこそ、その時代で生き抜ける力をつける、それこそが学力だということを、改めて強く意識していこうと思いました。学力の中でも、今いっしょに学習している子どもたちといっしょにつけていかななくてはならないのは、「判断力」だと感じています。学び、自分でリスクをしょって判断し、失敗も成功も経験する。自分自身の器も大きくしていきながら、そんな体験を 1 つでも多く共有していきたいです。

そんな学力をつけるために、すべての教育活動で言語に関する能力そのものを高めることが求められている訳です。ただ当初から言語活動は国語だけのものとか、話し合いイコール言語活動という誤解がありました。

言語活動の充実とは、言葉のきれいさや日本語の力ではなく、学習において言葉をつかうことの充実であることが分かりました。ノートに書いたり発表をしたりする時に、自分の頭に浮かんだことを言葉にすることで考えを明確にすることができることを再認識しました。子ども達に感想や思ったことを書かせる時に「何を書けばいいのかわからない」と言う子どもがいます。そんな時は、教師が明確な書き方の手立てを示した上で、書かせないといけないことを感じました。そのためには、評価の規準をしっかりと持ち、「やればよい」ワークではなく、どうするのか「考える」ワークにできるような教材設定を心がけたいと思います。

体育の学習カードの例は実に明快でした。『本時の目標は「○○を××する」という言い方で書くこと。』この一文だけで、子どもたちが設定する目標に教科の言葉が使われ、子ども達の努力の方向もより具体的になります。ただ単にがんばると書くだけより、はるかに学習効果が上がり、こういう取り組みを毎時間続けている子どもがあげる成果は、そうでないものと比べるとはるかに高いであろうことは容易に想像できます。また、ノートは言葉を積み上げていくためのデータベースであり、コーネル大学式ノートや、学習カード、ワークシートにインデックスを付けることなど、具体的な手立てについて教えて頂きました。

各教科にふさわしい言語活動があるということを知れた。自分の授業を振り返ると、どの授業中の話し合い活動も、「国語科」の言語活動になっていたなあ、と思った。各教科にふさわしい話し合い活動が繰り広げられるためには、声かけはもちろん、授業のめあてやビジョンを明確にしていくことが大事、担任自身も、子どもたちにどんな力を身につけさせたいかの目標を毎時間持つことが理想的な姿だと思った。

学習した言葉を使って思考し、考えを表現し、なかまと議論したり、協働したり、そうして『納得解』を紡ぎ出す。成熟社会に生きるうえで必要な力とされています。我々教師は、教育のプロとして、学習の目標を明確に言語化すること。そして我々自身が、教育の言葉で教育を語り、協働して、『納得解』を導き出すことを実践する。そんな姿が言語活動のゴールなのではないでしょうか。